

第2節 荷物の取り扱い方に関する指導方法等の検討

1. 概要

(1) 目的

第4章において述べたように、知的障害者の労働安全の指導項目としては荷物の持ち方・運び方等に関するものも含める必要がある。

一般に、我々は荷物を抱え上げる時に、図6-2のようなやり方になりやすい。しかし、このような姿勢で荷物を持ち上げると背骨や腰に負担がかかり、頻繁に繰り返すと腰を痛め腰痛を起こすことになり危険である。そのため、正しくは図6-3にあるような方法（しゃがみ込んで荷物を抱え、そのまま立ち上がる）で行う必要がある（身体障害者雇用促進協会他, 1985, 1987a、中央労働災害防止協会, 1998a）。そこで、知的障害者に対して、図6-3に示す単独での抱え運搬の際の荷物の持ち方・持ち上げ方について指導を行い、その結果を確認する中で知的障害者に対する指導上の留意点等について検討を行うこととした。

(2) 対象者

職業センターにおける職業準備訓練受講者の中で、以下の知的障害を有する者17名（以下「訓練生」という）を対象とした。訓練生の年齢は19歳～35歳までで、平均年齢は22.8歳である。性別は女性2名、男性15名である。障害程度は、療育手帳及び知能指数等から見て、軽度の者15名、中・重度の者2名と判断された。

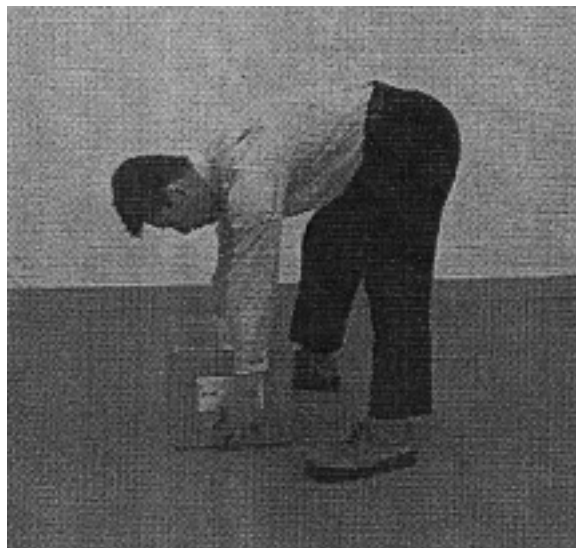


図6-2 腰に負担がかかる持ち上げ方

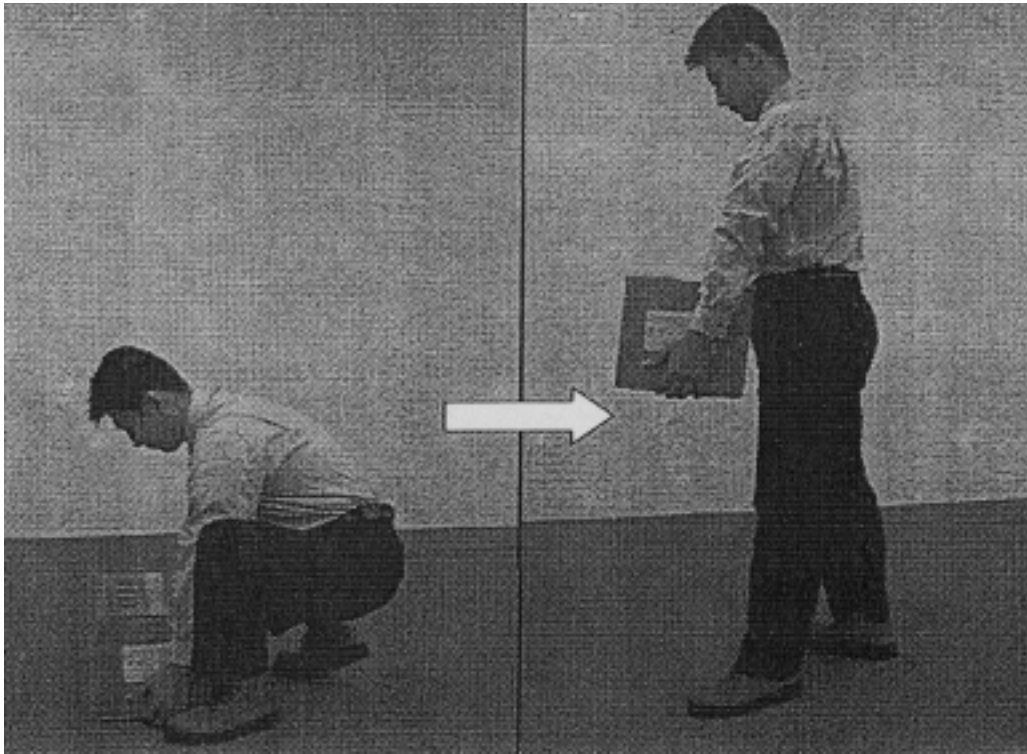


図6-3 正しい持ち方

(3) 方法

ア. 材料・用具

①重量物

重さ10kgの重量物（1辺30cm×45cm×25cmの段ボール箱）2個

②オーバーヘッドプロジェクター（OHP）及びスクリーン

③絵図

図6-4に示す絵図（OHPフィルム）を用いる。絵図は身体障害者雇用促進協会他（1987a）を参考に作成した。

④ビデオカメラ（1台）

イ. 手続き

以下の手続きで行った

(ア) 準備

①重量物2個を床に並べて置く。

②重量物から約5m離れた地点に机を置いて目印とする。

(イ) 指導等の実施

①各訓練生は重量物を1個ずつ持ち上げ5m離れた位置（机の手前）まで運搬して床に置く。

1個目の運搬が終わったら2個目の運搬を行い、2回の運搬作業を行ったら終了する（作業

の様子をビデオに記録する)。

②全ての訓練生が一通り作業を終えたら、絵図を OHP で示しながら、重量物の正しい持ち上げ方、及び運び方を指導する。指導の内容は、図 6 - 4 に従い、腰を落として荷物を抱え込み、足の力で持ち上げることである。

③①の運搬作業をもう一度行わせ学習の程度を確認する (ビデオに記録)。

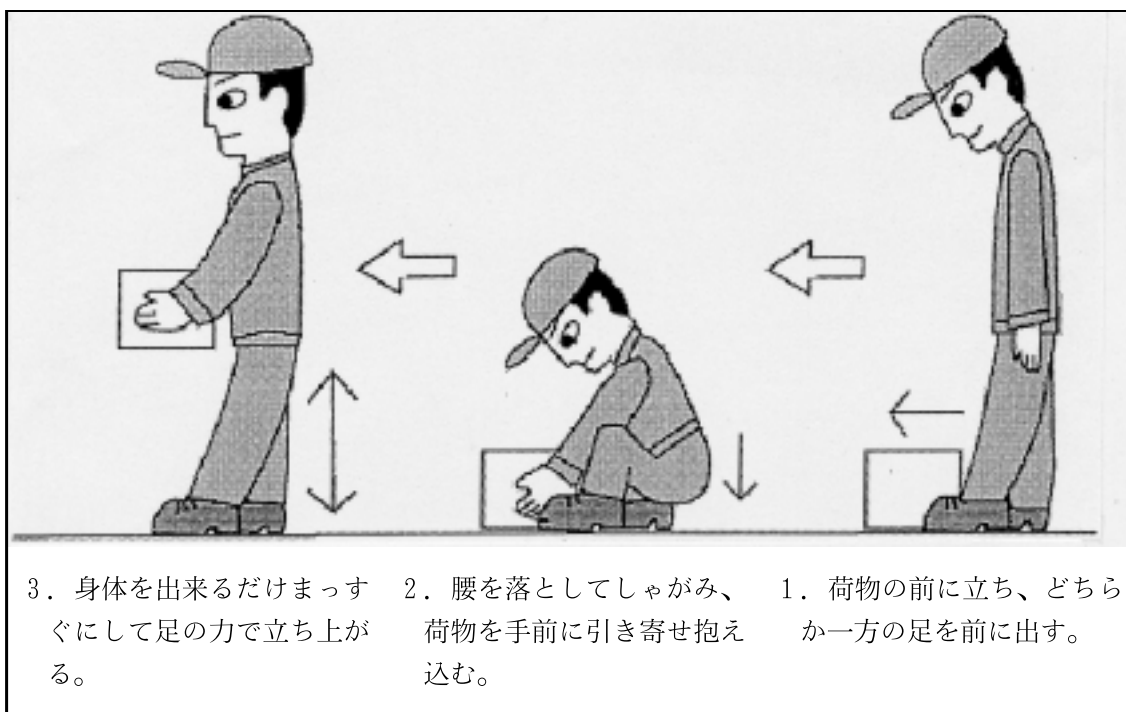


図 6 - 4 指導用絵図

以上の①～③の手続きを通して、対象者の作業中の動作や指導中の様子等を観察し、記録した

(4) 実施場所及び実施時期

平成10年10月中に障害者職業総合センター大集団検査室で行った。

2. 結果と考察

まず、各対象者の指導前と指導後の動作を比較した結果を表 6 - 5 に示す。表 6 - 5 において、図 6 - 4 に示すやり方に準じた動作が出来ていれば○とし、出来ていなければ×とした。表 6 - 5 によれば、指導を行う前の段階では17名中15人の者に正しくない動作が見られたが、指導後にはそのうち13名が正しい動作を行うことが出来るようになった。しかし、2名の対象者については指導後も正しい動作は出来なかった (H、Q)。この他、2名の対象者は指導を行う前から、ある程度正しい動作が出来ていた (G、O)。

表 6 - 5 対象者に対する指導の結果

対象者	指導前の動作	指導後の動作	備 考
A	×	○	指導後の試行ではじめ正しくない持ち上げ方をしようとするなど必ずしもしっかりと定着していないようだ。
B	×	○	
C	×	○	指導後の試行ではじめ正しくない持ち上げ方をしようとするなど必ずしもしっかりと定着していないようだ。
D	×	○	
E	×	○	
F	×	○	
G		○	
H	×	×	しゃがみ込んで荷物を抱え込めないため、困難。
I	×	○	
J	×	○	
K	×	○	
L	×	○	
M	×	○	
N	×	○	
O	○	○	
P	×	○	
Q	×	×	指導中は正しい動作が出来たが、指導後の試行で忘れてしまった。

ところで、表 6 - 5 に示すように指導を行った結果、ほとんど全ての対象者に関して一応正しい動作が出来ているが、しかし、個別に細かく見ると必ずしも円滑な動作が出来ているわけではない。表 6 - 6 は、表 6 - 5 において、指導後の試行で正しい動作が出来ているとした者（H、Q 以外）について指導中に観察された各対象者の個別の動作についてまとめた。

表6-6 各対象者毎の指導の際の観察事項

対象者	備 考
A	特に問題なし。
B	片膝をつかないとしゃがみ込めないため、動きがぎこちない。
C	特に問題なし。
D	腰を落とした状態で荷物を抱え込むことがやや難しい。
E	特に問題なし。
F	足を開いてしゃがみ込むことが少し難しい。
G	特に問題なし。
I	足を開いてしゃがみ込むことが簡単に出来ないため、荷物を抱え込みにくい。
J	特に問題なし。
K	特に問題なし。
L	足を前後に開いてしゃがみ込めないため、荷物を抱えにくい。
M	荷物を手前に引きつけて抱え込むことが少し難しい。
N	足を開いてしゃがみ込みにくいいため、動きがぎこちない。
O	特に問題なし。
P	特に問題なし。

表6-6に示すように8名の対象者（B、D、F、I、L、M、N）に関しては必ずしも円滑な動作が出来ているとは言えない状況も見られた。表6-6に見られる内容は、主として身体の硬さ、不器用さに関するものと見られた。また、このことに関連して、ほぼ全ての対象者について、実際に指導を行う上では集団的に指導するよりは個別に例を示して反復的に指導をすることが必要になる場面が多かった。さらに、対象者のこのような動きのぎこちなさなどから見て、今回使用した教材（重量物）はやや大きすぎて扱いにくい状況も感じられたことから、1辺30cm程度の比較的小さいものの方が練習としては扱いやすいように感じられた。

以上のことから、ここで指導した重量物の持ち上げ方については一般健常者にとっては特別難しいことではないが、知的障害者の場合には必ずしも簡単な技能ではないことが分かった。特に身体の不器用

さなどからしゃがみ込んだ姿勢が保てない者や姿勢が不自然になる者が少なくないこと、また、繰り返し指導を行っても短時間では身につかない者も見られた。重量物の持ち方、運び方に関しては知的障害者については簡単に身につかない技能でもあることから、職業前訓練の場で時間をかけて指導しておくことが適切である。特に今回の指導を行う中で見られたこととして、知的障害者に関しては集団的に一通り指導を行ったのでは不十分であり、個別に対象者の運動能力等の状況を見ながら指導することが必要と考えられる。